

日本SFの世界

福島正実編





福島正実編

角川書店



日本SFの世界

昭和五十二年五月三十日 初版発行

編者 福島正実

発行者 角川春樹

発行所 株式会社 角川書店

東京都千代田区富士見二ノ十三ノ三 郵便番号一〇二一
振替東京三一九五二〇八 電話(〇三)二六五一七一一

印刷所 信教印刷株式会社

製本所 鈴木製本所



落丁・乱丁本はお取り替えます

0093-872180-0946(0)

日本SFの世界

福島正実編

日本SFの世界——目次

トータル・スコップ
完全映画

ヴァルプルギスの夜

ゆたかな眠りを

逢いびき

解けない方程式

夢判断

ムーン・バギー

緑の時代

えきせんとりき
易仙逃里記

ある吸血鬼の死

ブルドッグ

畸形の機械

安部公房

荒巻義雄

生島治郎

石川喬司

石原藤夫

久野四郎

高斎正

河野典生

小松左京

田中光二

筒井康隆

都筑道夫

セ

三

四

五

六

七

八

九

一〇

一一

一二

一三

改体者

豊田有恒

一九二

ジンクス

半村 良

二〇三

革命のとき

平井和正

三三

分茶離迦ふんだりか

福島正実

三三七

壁の穴

星 新一

二五五

時間と泥

眉村 卓

二六九

落陽二二一七年

光瀬 龍

二八三

花一輪

矢野 徹

三〇一

地球エゴイズム

山田好夫

三〇七

福島正実氏と私

三三九

(配列は、作者名のアイウエオ順)

裝
幀
公
司
修

トータル・スコープ
完全映画

安部公房

二兎を追う者は一兎を得ず、ということわざがあります。しかし私は、生来欲が深いらしく、両方とも捕えてやらないと気がすまず、いろいろと考えたあげくに、二兎を合わせて一兎にしてしまう工夫を思いつきました。そうすれば二兎を同時につかまえることができる。ただし、この兎は、二羽を一統に合わせたものですから、どうしても体が——頭から尻尾まで——二羽分あり、しかしその縦目がひどく目立ってしまいます。このままでは、いかにもどうも格好がわるい。だが半分に断ち切れれば、それぞれが立派に一羽として通用してくれるのですから、二倍につかうことができる。贈答用にするにしても、同時に二人を満足させることができる。やはり二兎を追って損はないのです。

さて、私はこの一石二鳥とでもいうべき兎の前半を空想科学小説の愛読者のために、後半を、推理小説の愛読者のために、二羽分にしてプレゼントすることにしました。

では、Kさん、さっそくにも話をはじめていただきたいのですが……あ、ちょっと待って！……前半の、空想科学小説の部分では、まだ君の身分は隠したままにして

おくほうがいいと思いますね……後半が始まるまでは、単なる報告者にすぎないということにしておいて……

——分っています。では皆さん、作者の注文によって話が後半の推理小説の部分に入るまで、私の身分職業はふせておくことにしましょう。しかし、私の身分の如何にかかわらず、この話は実に愉快なんだ。というより、この前半の話の面白さは、私の存在などとはまったく無関係に……いやむしろ、私の存在などを無視したところに……

(Kさん、どうぞ、前置はそれくらいにして……)

——分っているよ……ええ、つまり、その話というのがね……はじめから、筋道立てて、お話しすると……ええ、その前にちょっと、諸君はT計画というのを聞いたことがありますか？……ない？……それでは、トタスコ計画は？……それでも分らん……じゃあ、トータル・スコープ計画の略だと言えば？……なるほど、そこまで言えは、さすがにお分りのようですね……なに？……完全立体映画のことだろうって？……駄目駄目、その程度の知識では、知らないというのも同然だな……このトータル・スコープは、立体映画などという原始的なアイデアとは、まるで次元がちがうんだから……

そもそも、立体映画などという代物は、それがいかに真実らしく見えたとしても、要するに投影されるスクリーンは、あくまでも観客の外にある。平面映画の、延長にしかすぎないわけだ。ところがこのトータル・スコープは、そんなものとは、まるでちがっているのです。スクリーンは、観客の内側につくられる。いいですか、内側にですよ。単に、眼で見、耳で聞き、鼻で嗅ぐといったような、初歩的感覚刺激映画とは、根本的にちがったものなんだ。あえて言うなら、その立体という文句をとって、ただ完全映画、もしくは絶対映画とでも呼ぶべきでしょうな。

すなわち、トタスコ映画は、人間の全感覚ならびに知覚神経を、同時的かつ全体的に刺激する。観客は、単に聞いたり眺めたりするだけでなく、映し出されたものを、そのまま事実としてそっくり体験できるわけだ。分りますか？つまり、トタスコの映像をうみだすものは、もはや光や音ではなく、直接脳細胞や神経を刺激する、電気的刺激なんだということです。そして、フィルムは、イメージを、その電氣的刺激の位置や強度や波形に翻訳した、一種の磁気テープのようなものになるわけです。

さてこの、神経生理学と、電子工学の粋を集めた、現代科学の結晶とでもいべきT計画は、三年ほど前から、東洋映画の出資によって、着々と、しかし秘密裡に進められてきた。だが、いくら秘密裡といっても、完全にかくしお

おせるといわけにはいかず、またこれがテレビ攻勢に対する起死回生の妙策であるとなれば、さまざまな圧力がかけられるのも、当然のことだ。とくに妨害がひどかったのは、言うまでもなく資金調達の問題だった。苦境をのがれるために東洋映画の社長久山氏は、別にT工業株式会社というのを設立し、自分の腹心の上田専務を、その新会社の社長に起用することにしたのです。

まあ、以上がその沿革のあらまし……次にいよいよ、そのT計画が完成して、トータル・スコープ第一号の試写会が行われたときの異常な出来事についてお話しするわけだが……そうそう、その前に試写用のテープの製作過程についても、ちょっと簡単にふれておいたほうがいかもしれない。

じつさい、機械の作成も大変だったが、シナリオの問題もまた、馬鹿にはならなかった。とにかく、トータル・スコープ用のシナリオは、単なるありきたりの物語では、ぜんぜん意味がない。どうやったら、その特殊性を充分に発揮できるかについて、特別にえらばれたライターたちのグループが日夜討論を重ねたものである。

TS用シナリオの特殊性とは、一体なんであるか？……言うまでもなく、観客がそのストーリーに対して、第三者にとどまっては、直接その物語に参加し、それも傍観者として参加するのではなく、主人公のものになりきっ

て参加するという点にあるわけです。

当然、シナリオも、その線にそって書かれなければならぬ。シナリオ委員会は、その方向にそのものとして、次の三つのタイプがあることを結論しました。

- (イ) あこがれの実現
- (ロ) 空間的異常体験
- (ハ) 時間的異常体験

その内容についていささかの説明をくわえれば……(イ)は、たとえば、恋愛の成就。王者のごとき生活。自ら、美男美女、もしくは権力者になって、あこがれられる体験。金持になってみる……その他である。

(ロ)について言えば、たとえば空を飛んだり、透明人間になつてみたりすること。火星旅行。怪獣の出現等による、恐怖の体験。殺人、強盗等の、悪事のころみ……等々である。

(ハ)については、委員たちの意見も、ついに完全な一致を見ることはできなかった。一部の者は、長い一生の、圧縮体験が可能ではあるまいかと言ひ、別の者は、最後まで反対しつづけた。その反対理由は、普通映画における時間の圧縮は、要するに時間の断片を心理的飛躍によつて埋めた、見せかけの圧縮にしかすぎず、一切を自分自身の体験その

ものとして感じるTSの場合には、絶対に不可能なはずだということです。それに対して、賛成派は、たとえば一時間の音楽を吹きこんだレコードを、十分に回転させた場合、ふつうなら人はそれを聞き分けることは出来ないが、しかしその人間がもし、テープと同じ速度で時間を動いているとしたら、やはり一時間の音楽として感じられるはずだという、時間相対説に立っていた。

さて、以上の報告にもとづいて、会社の最高首脳会議は、次のような決定を下しました。

(一) (イ)と(ロ)は、一つのストーリーに合成、もしくは統一できるものと考える。

(二) (ハ)については、とくに上田社長が強い関心を示しておられるので、ともかく試験的にためしてみることを要請する。

それはそうだろう。もし成功して、五分で五時間の体験が与えられるということにでもなれば、採算の上でも、すばらしい利益をうんでくれるわけです。

……というような次第で、シナリオ委員会は早速、(イ)と(ロ)と一緒にしたもの、(ハ)によるものと、計二本の試写用シナリオを作成することになりました。

(イ)と(ロ)と一緒にしたものとなれば、当然、怪獣ものと、恋愛ものの、合成ということになってくる。最初の担当者がたててきたのは大体次のようなプロットだった。

ある青年が、宝のありかを記した地図を手に入れる。南海の孤島である。たどりついてみると、そこにはゾガバという原始怪獣がすんでいた。青年は、幾度か危険にみまわれたが、最後に無事宝を手に入れて、億万長者になることが出来た……

「女が足らん！」と、委員の一人が言った。

「怪獣の攻撃から、どうやって逃げ出せたのか、そここのところがまるで不十分だね」と、別な委員が言った。

そこでプロットは、第二のライターによって、次のように変更されました。

ある青年が、宝のありかを記した地図を手に入れる。長い航海のあとやっと、南海の孤島にたどりつく。ところが、船の中には彼を恋いしっている娘が一人、こっそりとかくれていたのである。おまけに、島には、ゾガバという原始怪獣がすんでいた。娘はまったくの手足まといだ。青年は娘を叱り、娘はさめざめと泣く。やがてゾガバの襲撃により青年は苦境におちいる。ところが、そのとき、娘がゾガバの弱点を発見したのである。ゾガバには、まったく嗅覚がない！ そのために、本物の人間と、人間の形をした人形との区別が、まるで出来ないらしいのだ。青年たちは、せつせと人形をつくり、ゾガバの目を混乱させ、無事宝を手に入れる。青年は娘に感謝し、二人はめでたく結ばれる……

委員たちは、腹をかかえて、大笑いした。そして、完璧に荒唐無稽であり、まさに大衆の好みに合ったものであることを認めました。青年を、科学者にする事、娘を、なるたけ小型のセクシー・ガールにすること等、二、三の小さな修正を経て、それでほぼ決定になりかけたとき、映画心理学の専門家である一人の委員から、きわめて重大な質問と提案がなされたのです。

「ちょっと、うかがいますが、その中で、当の観客がなるべき主人公は、一体誰なのでしょう？」

「もちろん、その青年科学者にきまっているじゃありませんか……あ、そうか、あなたのおっしゃっているのは、つまり、観客が女である場合の問題ですな？」

「いや、男になりたいというのは、女にとつての大きな願望の一つなので、それはそれでかまわないでしょう。ただ私には、そのプロットが、スクリーンが外部にある普通映画の場合に、あまりにも似すぎているように思われないのです」

「と、おっしゃると？」

「そう……結論から、言っちゃいますと、私の考えでは、主人公はそのゾガバ自身でなければならないように思うのですが……」

「ゾガバが……主人公?!」委員たちは、口々に叫んだ。「なるほど、こいつは画期的だ!……ショックングだ!……」

「実に痛快なアイデアだよ！」

「いや、言わせていただきますと、これは単なる思いつきではなく、むしろきわめて論理的な結論なのです。一時流行した怪獣映画が、なぜ大衆をとらえたか？……決して、その怪獣をやっつけることに興味があつたからではありません。その怪獣のものがすごさに、ひかれていたのです。その証拠に、もしその怪獣がどれほど強くても、外観が仏像のようにのどかなものだったとしたら、おそらく興味は半減してしまうことでしょう。怪獣の、その超絶性……ちょうど、残酷な戦争映画に人々がひかれるように……その非人間性にあこがれたのです。だから、従来の普通映画だって、出来れば怪獣を主人公にしたかったにちがいない。ただ、スクリーンが外部にあるという制約から、そこまで観客の感情移入を期待することは不可能だったので、妥協的に、しめくくりだけは一応怪獣退治にもつていかなければならなかったのだと、私は考えています」

「なるほど！ 内部スクリーンで、どんなものにも感情移入が可能なトラスコ映画の場合には、怪獣を主人公にすることに、なんの遠慮もいらないというわけですか？」

「そのとおりです。ほんの一時間ばかりのあいだ、恐るべき無敵の怪獣になって、思いっきりあばれまわってみるのも、現代のような世の中では、よき精神の健康法ではないでしょうか？」

「まったくだ！ たしかに、怪獣を主人公にすれば、(1)の願望の実現も、(2)の空間的異常体験も、同時にびつたりと満足させることができますな。いや、すばらしい！ 想像するだけでも、胸がわくわくしてくるじゃないですか！」

「しかし」と委員の一人が、小声で口をはさんだ。「ただ一つだけ、恋愛が欠けているように思うんだが……」

「そんなことは簡単です。メスのゾガバをつくって、あてがつてやればいい。自然の恋、巨大な愛、すばらしいじゃありませんか」

「なるほど、こりゃたしかに、巨大な愛だな！」

委員たちはまた、涙をながして大笑いした。こうして、試写用シナリオの一本は、無事決定をみたのでした。

ところが、次の一本——時間の圧縮体験——のほうは、目的がはつきりしすぎているせいか、かえってなかなかきまらなかった。いくら長い時間といっても、その内容が単調なのでは、つまらない。そこでとりあえず《××の生涯》といった、伝記ものでいこうということになり、その人選をはじめたのだが、次から次にアイデアが増える一方で、いっこうにまとまらない。そこで、次の四人にしぼって、その中から抽選でえらぶことにしたわけです。

ナポレオンの生涯 豊臣秀吉の生涯

ベートーベンの生涯 チャタレー夫人の生涯

抽選の結果、一点の差で、ナポレオンの生涯がえらばれました。

さて、いよいよ、映写用テープの製作です。シナリオを、電子頭脳の言葉に分解翻訳してやるのが、その第一段階。これは、動画の製作に似た分業で行われます。次に、それを電子頭脳にかけてやれば、それで完成。俳優もセットも必要ありません。電子頭脳の中に、あらゆる演技、あらゆる感情、あらゆる風景が、すでにストックされているからです。むろん、怪獣ゾガバの形態などのように、まったく独創的なものは、当然、モデルをつくって、新規に記憶させてやらなければならないわけですが……

テープが完成しました。

それから数日して、トタスコ映写装置第一号も完成し、つづいてすぐに、第一回の試写が行われることになった。その日は、映画関係者のほかに、新聞記者も招待された。会場は、いささか殺風景な、研究所の地下室だったが、しかし異様な興奮と熱気がたどっていました。無理はありません。もし試写会が成功すれば、映画界の革命であるのみならず、全娯楽産業に対して、再び王者の位置を占めることができるのですから……

人々は、不思議そうに、会場を見まわし、^{ツギヤ}呟きあいました。

「いったい、スクリーンはどこにあるのかね？」

「いや、スクリーンは使わないのだそうだよ。つまり、脳の中に、いきなり映写するといったようなものらしいね」

「なるほど……しかし、そうすると、観客のめいめいが、何か機械を体か身につけることになるのかな？」

「あれだよ、ほら、あの正面のボックス……」

「はほう……あの中に入るのかい？ こりゃたしかに変わっているねえ……」

それは、キラキラ光る、電話ボックスほどの大きさの、金属性の箱だった。やがてその前に、東洋映画の社長久山氏が立つてあいさつをする。

「本日は、お忙しいところを、かくも盛大にお集りいただき、まことに感謝にたえません。さて、御招待申し上げましたとおり、TS工業の社長、上田君の献身的な努力によって、ついに世紀の驚異、トータル・スコープの完成をみたのであります。かつて、西洋の哲人アリストテレスは、こう申しました。人生とはすなわち、体験である。トータル・スコープの発明は、その体験の拡大であり、まさに人生の拡大にはかならないのであります。わずかの金銭で、あらゆる偉大な人生を、いながらにして手に入れ、体験することが出来るのでありますから、まさに万歳である。上

田君から完成の報せを受取ったとき、私はつくづくこう思ったのであります。生きていてよかった！この事業は、絶対に成功する。投資した方々も、かならず満足されることでありましょう。なぜなら、このトータル・スコープは、ただ単に新しい映画というにとどまらず、これまでとはまったくちがった、観客との画期的な関係をつくりだすにちがいないからであります。従来の映画やテレビは、観客にとつての娯楽品にすぎなかった。しかしわがトータル・スコープは、まさに人生の必需品となるにちがいないのであります。この新映画があるかぎり、人々はもはや現実に対して不平不満を言う必要がなくなる。人々は、どんな人生でも自由に選択できるのだ。経済的に許せば、生涯、映画館に入りびたりになっていたと思うことだろう。この私にしてからが、晩年はトータル・スコープの中で、たのしく愉快な青年の人生を送りながら、夢うつつのうちに死んで行きたいと思っている。そこで、これはまだ私案だが、将来ぜひともTS保険というものを創設し、若いうちから金を払いこんでいて、一定の額と年齢に達したところで、TSボックスの一つを占有し、残りの人生をその中で送るといふようにしたいものだと思うのです。そうなれば、あたら青春を労働の中にすりへらし、やっと安定を得たと思つたときには、すでに晩年を迎えていたといつたような矛盾はなくなり、人生の最後に、もっとも美しく理

想的な青春を迎えることができるのだから、これほど素晴らしいことはない。人間万歳とは、まさにこのことではないでしょうか？いや、じつに素晴らしい。TS保険は、かならずや万人によるこびをもつて迎えられるに相違ないのであります。TS工業が、全産業の花形になってさかえるであろうことは、もはや疑うことのできない事実なのであります……」

得意気にふりまわす視線のままで、満足そうにうなずく者もいれば、うちのめされたように、目をふせて、自分の靴先を見詰める者もいる。落胆している者の中には、他社の重役たちやテレビ会社への投資者たちばかりでなく、TS工業を子会社として発足させることに極力反対してきた東洋映画の重役たちもまじっていた。やむをえない、退職金でTSボックスの一つを買込もうといったような顔つきで……

久山氏のあいさつの後、主任技師が立上つて、簡単に機械の仕組を説明する。

「……トタスコは、普通映画のように、外部にスクリーンをおかない、内部スクリーン・システムでありますから、したがって、スクリーンは、ちょうど観客の数だけなければならぬわけです。いま、皆さんがごらんになっている、このボックスが、そのスクリーン……というより、観客の内部にスクリーンをつくり出すところの、光道なのであり